

社会科を中核にした統合カリキュラムに関する一考察

— リンドキスト&セルウインの所論を中心に —

山田 秀和

本研究は、学校カリキュラムにおける社会科の位置づけや編成のしかたを考察するために、T.リンドキストとD.セルウインによる所論に着目する。リンドキストらは、社会科を中核にした統合カリキュラムを主張しており、具体的な授業事例を示している。リンドキストの実践を取り上げて分析した結果、社会科のテーマや概念の理解を主目標とし、それを効果的に達成するために他教科領域のスキルを活用する授業構成の方法が明らかになった。こうした構成は、テーマや概念を軸にして授業の一貫性と領域の広域性を両立させようとする試みとして意義づけられるが、そのバランスをどのようにとればよいのかなどのさらなる検討課題も指摘できる。

Keywords : 社会科, 統合カリキュラム, 授業構成, アメリカ

I. はじめに

リテラシーやコンピテンシーなど、教育全般に関わる汎用的な能力¹⁾の育成が求められるようになり、教科の形や役割も問い直されつつある。学校カリキュラムの中で社会科はどのように位置づけられ、どのような形態をとることができるのだろうか。

上記のような能力の育成は、わが国のみならず多くの国で現在の課題となっている。特に、アメリカでは、歴史や社会科でも育成すべき読み書き等の能力が、英語／リテラシーのコモン・コア・ステート・スタンダード²⁾で示されたことなどの影響もあり、他教科領域との統合カリキュラム (integrated curriculum) やその授業の方法に関する議論が一層高まっている。統合の動きへの是非はともかく、従来からの研究や実践の蓄積も豊富にあり、社会科の位置づけや形態について検討すべき事例は多い。こうした様々な統合の事例を手がかりにして、カリキュラムや授業を構成するための具体的な方法論を引き出し、その論理的・実際の帰結や意義・課題を考察し整理していきたい³⁾。

なお、統合的な教科目等の編成については、コア・カリキュラムや合科学習、総合学習などといった名称のもとで、わが国においても実践され、研究もな

されてきた。社会科に関する代表的な研究では、白井嘉一⁴⁾のものを挙げるができる。白井は、カリキュラムの統合に着目した理論的な分析を行っている。ただし、統合についての体系的な概念枠組みやわが国で歴史的に展開されてきた主張・実践について論じることに重きがおかれているため、本研究の関心やアプローチのしかたとは異なっている。他にも、総合的な学習の時間の創設と関わって多くの研究がなされた⁵⁾が、その中心は社会科との関連や違いを示すことにあった。

さて、本稿では、社会科の一つのあり方として、T.リンドキスト (Tarry Lindquist) とD.セルウイン (Douglas Selwyn) の「社会科を中核にした統合カリキュラム」論ともいべき考え方に着目する。リンドキストらのアイデアは新しいものとはいえないかもしれないが、現在の課題に対して示唆的であるととともに、こうした取り組みを理論的・実践的に検討し、議論の俎上に載せていくことは重要だと考えている。

Ⅱ. 「社会科を中核にした統合カリキュラム」論の基本原則

1. なぜ社会科を中核にした統合なのか

リンドキストとセルウィンは、共著『社会科を中心に－子ども、内容、リテラシーの統合－』⁶⁾にて、次のように論じている。

「私たちは、社会科を教えることに対して統合アプローチを支持しているが、それ以上に、社会科を学校カリキュラム全体の中心に位置づけることを主張する。」⁷⁾

リンドキストらにとって、社会科は他の領域を統合するハブに位置づけられるべき存在である。統合カリキュラムを支持する理由として、リンドキストらは、文献（『最高の実践 (Best Practices)』第二版）を引きながら、ある日の読みの活動が次の日の討論や書き活動、意思決定につながるように概念が長期的に発達させられたとき、子どもは様々な考え方の間の関係をつかんだり、広範な一般化を形成・理解しやすくなったりすることを挙げている⁸⁾。また、独立した授業ではなく、中心テーマや概念の周辺に知識やスキル、態度を統合した単元を構想する方が、自分たちがどこにいるのか、どこに向かっているのか、学んだことすべてがどのように結びついているのかを子どもたちが認識できると指摘している⁹⁾。さらに、統合には、教師や子どもが一日を有効に使えるという実際的な利点があることを論じている¹⁰⁾。

社会科を中心にする理由についてはどうか。リンドキストらは、言語科目が社会科の内容と最も結びつけやすいとしている。また、数学であっても、データや統計・確率、図、タイムラインを分類したり整理したりするような論理的・数学的なスキルを応用するとき、社会科の内容に組み込むことができるとしている。理科や保健も状況によって結びつけられると考えている¹¹⁾。社会科は他教科と結びつけやすく、また、そうすることで相乗効果を期待できると判断されていることがうかがえる。実際に、リンドキストは、共著の中の質疑応答の章で、社会科的な内容やイシューをもとにした読み書きの学習や、理科と関連づけた社会科の事例を紹介している。また、セルウィンは、すべての物事は状況の中で発生し、そして、相互依存的で相互関係的な世界の中で生じているので、社会科が学校の一日のうちのハブになり得ることを主張している¹²⁾。

リンドキストらは、読み書きのような活動と概念や一般化の成長を相関的に捉えており、社会科を中核にすることで教育効果が高まることを期待していると考えられる。

2. 授業をどのように計画すればよいのか

リンドキストらは、統合には様々なレベルがあることを指摘しており、カリキュラムを完全に統合してしまうことだけを想定しているわけではない。実情に合わせて判断することが重要だと論じている¹³⁾。こうしたことを踏まえると、たとえば、教科書等の内容の系統に即したカリキュラムを構成し、個々の単元を統合的に組織するような現実的な方法も考えられるだろう。

では、統合カリキュラムの授業はどのように計画すればよいのか。リンドキストらは、伝統的な学問分野ベース (discipline-based) のアプローチと異なり、中心的なテーマや概念に基づく学習を提案している。概念は項目のカテゴリーに名前をつけるものであり、物理的あるいは抽象的なことに言及できるものとされる。こうした概念を単元の中心に据えることで、高次の思考を促すことができると考えられている¹⁴⁾。なお、「テーマ」と「概念」という言葉はいくぶん互換的に使われており、違いはそれほど意識されていない。

さらに、概念ベースの統合学習のメリットに関するリンドキストらの記述を要約して整理すると、次のようになる¹⁵⁾。

- ①授業の焦点を明確にし、何を教えるかについての決定を導くことができること。
- ②カリキュラムに一貫性が出るので、なぜ今そのようなことをしているのかを子どもが理解できること。
- ③一つの文脈から別の文脈へと学習の転移を促すこと。
- ④過程と内容のつながりが明確にあること。
- ⑤文脈に即した学習を促すことができること。
- ⑥様々な角度や見方から提示されたトピックによって、より統合された知識基盤を獲得させることができること。
- ⑦学習の広がりや深まりを促すこと。
- ⑧学習したことについて省察を促すこと。

リンドキストらの授業づくりは、重要なテーマや概念を選定することから始まるものと考えられるが、それは、「まとまりがあり、現実との関係を教材に持たせ、学習の深まりと広がりを与え、時間の効果的な使い方を可能にするもの」¹⁶⁾であるべきだとされている。

また、授業の導入においては、概念やテーマに夢中になることが最も重要であるとし¹⁷⁾、例として、「二つの民主主義」や「川の近くで発展した二つの文明」のような類似しているように見えるもの間にあるつながりを探したり、類似性や相違性を探索

したりするような場面を挙げている¹⁸⁾。

授業の終結については、学習したことを示すことのできるプレゼンテーションやパフォーマンス、書き物のようなプロジェクトが好ましいとリンドキストは質疑応答の章で答えている。最終的には、コミュニティへの関わりを促すような終結でありたいとリンドキストは考えている¹⁹⁾。

授業は以上のような枠組みのもとで構想される。次に、授業の実際を見ることで、より詳細な開発の方法に迫っていこう。

Ⅲ. 「社会科を中核にした統合カリキュラム」論に基づく授業の実際

1. 授業構成の手順

具体的な授業づくりの方法はどのようになっているのか。リンドキストとセルウィンは、共著の中でそれぞれが授業の事例を示している。授業づくりの手法には違いがあるが、ここでは、筆頭著者のリンドキストの提案に即して述べていきたい。

リンドキストは、社会科を中核にした統合カリキュラムの単元を構想するためにカリキュラム・ディスクという円形のモデルを提案している。これは、子どもがトピックを深く学ぶときに経験すべき活動である七つの要素を表したものである。中心に「概念またはテーマ (Concept or Theme)」が示され、その周辺に「目標・目的 (Goals Objectives)」が位置づけられる。そして、七つの「R」を頭文字にした活動がさらにその周辺に配置されている。なお、これから述べる七つの活動に順番はない。どこから始めてもよいとされている。リンドキストの説明をまとめると、以下のようなになる²⁰⁾。

一つ目は「読む (Read)」である。これは音読したり、一緒に読んだり、一人で読んだりして情報を獲得するようなスキルに関わる活動である。二つ目は「反応する (Respond)」。社会科の内容を読むときに、全体、小グループ、個人で意味を生み出す活動である。三つ目は「調査する (Research)」。資料や情報調査技能を使用したり、情報を見つけたり、使えるように整えたりするスキルに関わる活動である。友達と協同したり、個人で実践したりすることで効果的になされるとされている。四つ目は「表現する (Represent)」。批判的思考や創造的思考のスキルに関わる活動である。リンドキストは、情報を分類したり、解釈したり、分析したり、要約したり、総合したり、評価したりすることを批判的思考スキルと考えている。また、学習したことを表現する際には、創造的思考を働かせることが重要になる。創造的思考スキルは、子どもの多重知能 (multiple

intelligences) を発達させる機会となるべきだとリンドキストは述べている。五つ目は「対応する (React)」。個人や集団で社会的、政治的に世の中に参画するための意思決定スキルに関わる活動である。現実世界とのつながりを社会科に持たせ、社会科を生き生きしたものにする活動と考えられている。六つ目は「省察する (Reflect)」。何をしたか、何を学んだか、どう感じたかについて考えるメタ認知に関わる活動である。七つ目は「関連づける (Relate)」。他の教科領域と社会科の学びを結びつけることである。こうすることにより、有意味で機能的で子どもにとって役に立つ学びとして統合的な学習を組織することができると考えられている。

リンドキストの授業づくりは、以上のカリキュラム・ディスクを基盤にしてなされていく。実際の単元「世界への窓 (Windows on the World)」と「グローバル村、グローバルな展望 (Global Village, Global Vision)」を次に見ていこう。二つの単元は連続した一つの単元として扱われており、リンドキストの社会科観や統合カリキュラムの考え方が反映されている。

2. 単元「世界への窓」

「世界への窓」は、4-5学年の混合クラス用に開発された世界地理と世界文化の導入的なテーマの単元である。国や文化を比較したり、意味のある情報を収集・整理したり、一般化を形成したり、環境が文化を形づくるのかどうかを調査したりして、世界地理や世界文化の認識を高めることがねらいとなっている²¹⁾。授業は実際に実践されたものであるが、著書では、単元の過程が基本的に現在形で記されている。その記述をもとに主な学習内容を抜き出し、箇条書きで整理・要約したものが表1である。「学習過程」に示した数字は、筆者が便宜的に割り振ったものである。それぞれのまとまりを「活動」と呼ぶことにして、番号順に説明していこう²²⁾。

単元はカリキュラム・ディスクに対応した七つの活動と評価で構成されている。

活動1「読む (Read)」では、最初に世界の様々な国の絵本を読み、子どもが伝記や民話、おとぎ話を見つける。さらに、それらを分析するとともに、大陸ごとに物語を分類し、類似点と相違点を探していく。また、各地の物語が伝えようとしている適切な行動のしかたや、物語が警告しているその地域の危険について議論する。その際には、家族が自分に話している物語についてもクラスで共有する場合があることをリンドキストは述べている。これらの学習を通して、世界地理や世界文化に「夢中になる」

表1 単元「世界への窓」の構成

学習過程	主な学習内容
1 読む (Read)	<ul style="list-style-type: none"> 世界の様々な国の絵本を読み、伝記、民話、おとぎ話を見つける。 フィクションの六つの要素を用いて物語を分析し、ストーリーボード（絵コンテ）を作成する。 お互いのストーリーボードを読んで楽しんだ後、大陸ごとに物語を分類し、類似点と相違点を探す。 「もしあなたがその国の子どもで、その物語を何度も聞いたら、何を学習すると思うか？」と教師が問い、物語が読み手に対して適切な行動のしかたをどのようにして知らせたり、その土地での危険についてどのように警告したりしているのかを議論する。家族が自分に話している物語についてもクラスで共有する。
2 反応する (Respond)	<ul style="list-style-type: none"> 地球上の場所を特定するための緯度と経度のグリッド線からなる「グローバルアドレス」の使い方を学ぶ。 ゲームを通して、場所を見つけることを学び、示された緯度と経度の場所にどのような地理的状況があるのかについての一般化を始める。（24時間の時計や、グリニッジ標準時、国際日付変更線などの概念を使ったり、地図帳や掛地図、コンピューターを用いたりする。） 地図帳や世界地図を用い、物理的地図で観察したことやアメリカ北西部（※子どもたちが住んでいるところ）と地理的に比較したことに基づいて、アジアについてのいくつかの一般化を形成する。 伝説の解釈のしかたや羅針図の使い方について再考し、国の名前を挙げ、位置づける。 それぞれの子どもが調査する国を選ぶ（重なってもよい）。 知りたいことをブレインストーミングし、個々の調査を導く国のプロフィールを作成する。
3 調査する (Research)	<ul style="list-style-type: none"> 首都や公用語、人口、土地面積、最高標高と最低標高などの情報に関して、どれが重要か、あるいは知りたいと思うかについて議論する。 調査に際して、次の「調査の三つの段階」を活用する。 第一段階：fast-factsストラテジー。選んだ国について、地理的、経済的、文化的な「概略」に通じるように、資料からデータをみつけ、紙に記す。 第二段階：その住人や生活様式について、知的に、そして感情的に理解し始めるための、文化についてのより深い学習。「その人々はどのようなようであるか？」「彼らにとって何が生活を易しくしたり困難にしたりするか？」「彼らの生活は私たちとどのように似ているか、異なっているか？」「この国を訪問するならばあなたは何を一番楽しむか？」のような問いを探る。その国で人々がもがいている問題は何か、それは戦争か、飢饉か、資源の枯渇か、自然災害か、について言及する。その国に関する新聞記事のスクラップをつくる。小グループでお互いの見解を交換し、状況を比較する。 第三段階：より累積的で、より一般化された高次の思考。もしその国の人々が私たちのコミュニティを訪れたなら、何をみせるか、それはなぜかを考える。（これは、学習内容を自分たちの生活にどのように結びつけているかについての理解度をチェックするために使用する一種の評価である。）
4 表現する (Represent)	<ul style="list-style-type: none"> 明確にラベルを貼る方法を学び、12"×18"の白い工作用紙に選んだ国の物理的地図を描く。 ラベリングを行うとともに、伝説も組み込む。国の名前も見やすくする。大きくて、整理されており、正確で、カラフルで魅力的な地図を作成する。 可能ならば、18"のワイドペーパーの中央に地図を位置づける。時間があれば、国境や旗などのディテールを加える。 <p>【構成するスキル：窓を通り抜ける】</p> <ul style="list-style-type: none"> 作成した地図の紙を切ってペーパーバックの形にして折り重ね、作品「窓」をつくる。 関心のある情報を探索し、考察した上で「窓」に加える。
5 対応する (React)	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの「窓」を、下の学年の子どもと共有する 教室に戻った後、振り返りを行い、所見を共有し、コメントをする。 グループで、自分たちの「窓」を共有し、お互いに学びあう。 すべての窓を掲示板や教室に掲示し、それらを見て回る。
6 省察する (Reflect)	<ul style="list-style-type: none"> アジアの学習で行ったこと（「窓」の作成）を、繰り返す。1）アジア、2）ヨーロッパ、3）カナダ、メキシコ、西インド諸島、4）南アメリカの順で。（※段階的に要求水準を上げる。）

<p>7 関連づける (Relate)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・言語や数学的な論理、美術のスキルなどを統合するためのリサーチペーパーを書く。最初のデータシートは、首都や公用語、人口などの一般的なデータに関するもの。二番目は、住居や食べ物、娯楽などの文化に関するもの。三番目は、鉱業や林業、漁業などの経済に関するもの。他のパラグラフを加えてもよい。 ・リサーチペーパーに導入と結論が必要かどうかを議論し、分析や要約を行って書く。
<p>評価：全部をまとめる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作成した作品やリサーチペーパーを友達と見せ合い、厚紙で表紙と背表紙を作成して「世界への窓」プロジェクトブックとしてすべてをまとめる。(※これは、子どもの成長を示すミニポートフォリオになる。) <p>【読むことと書くこと】 (このプロジェクトと様々なスキル育成の関係が示されている。)</p> <p>【美術】 (このプロジェクトと様々なスキル育成の関係が示されている。)</p> <p>【最終評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「世界への窓」ポートフォリオを使って、次の課題に取り組む。 <ol style="list-style-type: none"> 1. あなたが調査した国々の類似している点を五つ列挙しなさい。その理由を説明するか、証拠を提示しなさい。 2. 異なる点を五つ列挙しなさい。その理由を説明するか、証拠を提示しなさい。 3. あなたが学習したそれぞれの国からお客さんがワシントン州にやってくるとしたら、何が一番興味を持ってもらえると思うか？(全部で四項目だけ列挙しなさい。あなたの選択の理由を示しなさい。)

(Lindquist, T., & Selwyn, D., *Social Studies at the Center: Integrating Kids, Content, and Literacy*, Portsmouth, NH: Heinemann, 2000, pp.42-63をもとに筆者作成。)

ことが想定されていると考えられる。

活動2「反応する (Respond)」では、緯度や経度で場所を見つけることを学習し、ゲームを通して様々な地域でどのような地理的状况があるのかを子どもが一般化していく。また、自分たちが生活しているアメリカ北西部に近い大陸からアジアを取り上げ、自分たちの地域との地理的な比較を通してアジアについての一般化を形成する。その上で、アジアに関して調査したい国をそれぞれが選び、その国のプロフィールを作成する。

活動3「調査する (Research)」では、三段階の調査で対象国を調べていく。第一段階は、fast-facts ストラテジー。選んだ国について、地理的、経済的、文化的な「概略」に通じるように資料からデータを見つけ、紙に記していく。第二段階は、その住人や生活様式について、知的に、そして感情的に理解するための文化についてのより深い学習。その国の地理的特徴や文化、抱えている問題について考察し、新聞スクラップ等を作成しながら学習を深めていく。第三段階は、より累積的で、より一般化された高次の思考。その国の人々が私たちのコミュニティを訪れたなら、何を見せるか、それはなぜかを考える。これは、学習内容を自分たちの生活にどのように結びつけているかを見取るための一種の評価にもなっている。以上のような調査の過程で、資料の読み取りや記述を行わせ、読み書きのスキルを向上させようとしている。

活動4「表現する (Represent)」では、選んだ国の物理的地図を工作用紙に描き、伝説や国境、旗などのディテールを加えていく。さらに、ペーパーバックの形に整えた作品(「窓」と表現される)にし、様々な情報を探索して付け足していく。活動を通して、子どもは、地理について、そして環境がその国の文化をどのように形づくっているのかについてよりよく学習できるとされている。このような「学びのための表現」は、テーマや概念についての子どもの理解を証明するものとなる。

活動5「対応する (React)」では、下の学年の子どもたちと自分たちの作品を共有する。その後、教室に戻って振り返りを行い、所見を共有し、コメントを述べていく。作品をグループで共有しながら、お互いに学び合うとともに、すべての作品を掲示板や教室に掲示し、それらを見て回ることになる。

活動6「省察する (Reflect)」では、アジアの学習で行った「窓」の作成を、「ヨーロッパ」「カナダ、メキシコ、西インド諸島」「南アメリカ」の順で繰り返す。その際には、段階的に要求水準を上げ、多重知能をより活用させるように計画されている。南アメリカの学習の頃には、熟練した調査者になることが想定されている。子どもの調査は、とても写実的で絵画的で運動感覚的になるとされている。

活動7「関連づける (Relate)」では、リサーチペーパーを書く。これは、言語や数学的な論理、美術のスキルなどを統合するための活動である。このよう

なりサーチペーパーを書くことで、リサーチライティングに関するコミュニケーションスキルと社会科の統合がなされるとリンドキストは指摘している。

「評価：全部をまとめる」では、すべてをまとめた「世界への窓」のプロジェクトブックを完成させる。これは子どもの成長を記録したポートフォリオになるとリンドキストは述べている。また、リンドキストは、この約3ヶ月にわたる活動が、読むことと書くことのスキルの向上に関係していることや、グラフィックデザインスキルを活用した「世界への窓」の作品づくりが美術領域の学びと結びついていることを論じている。最後に、調べた国の類似点や相違点を説明させるといったポートフォリオを用いた最終評価の課題が示されている。

このように、単元「世界への窓」は、世界地理・世界文化をテーマとして、地域の特徴や環境と文化の関係を認識していく活動であるとともに、広領域に渡るスキルの活用を意図的・計画的に組み込むものとなっている。

3. 単元「グローバル村、グローバルな展望」

「グローバル村、グローバルな展望」は、「世界への窓」で学習したことを応用する単元である。グローバル 이슈に気づき、分析し、解決策を求め、それぞれの考えを表現することをねらいとし²³⁾、地理的環境と人々の生活の関係やグローバル 이슈への理解を深めさせるように計画されている。「世界への窓」と同じ手順で作成したのが表2である。以下、リンドキストの記述に従って概要を示そう²⁴⁾。

活動1「気候帯を同定する（読む：Read）」では、子どもが世界の気候帯をチェックし、絵本を用いてそれらの特徴をまとめていく。また本単元では、毎回の授業の終わりに家族へのインタビューを宿題として課している。ここでは、気候が自分たちの生活にどのような影響を与えているのかを聞き取ることが課題となる。

活動2「生き物をつくる（反応する：Respond）」と活動3「気候的に正しい生き物の家（反応する：Respond）」では、グループごとに気候帯が割り当てられ、クルミやフェルト等を使って生き物を作成し、それぞれの気候帯でどのような生活が営まれ、どのような住居がつけられるかを考察していく。子どもは、牛乳パックなどで家づくり、それを通して地理的環境と生活への理解を深めていく。活動2、3の宿題は、違う気候帯や熱帯に住んだら暮らしや文化がどのように変わるかを家族に尋ねることであり、授業の内容を補完するものになっている。

活動4「家がつくられ、国が始まった！（調査する：Research）」では、家づくりの仕上げを行い、その特徴をクラスで発表する。宿題は、割り当てられた気候帯の問題を家族から聞き取ることである。

活動5「グローバルな国をつくる・・・グループがそれを易しくしたり難しくしたりする！（対応する：React）」では、インタビューから得られた問題をチャートペーパーに列挙するとともに、気候帯の特徴をより反映した国にする方法について考察する。次に、リンドキストが用意した大判のブッチャーペーパーに国を描き、家や生き物を位置づけていく中で、グループ間の摩擦が生じるようになる。これは、国境紛争や侵略をシミュレートする学習であり、子どもたちは、その原因と結果や戦争以外の解決策を考察することになる。家族へのインタビューは、「他国との問題を抱えている国は何ができるのだろうか？」である。

活動6「データを定義する（対応する：React）」では、各国に関するデータをまとめるとともに、他国との問題に対処する方法について議論する。宿題は、現実に存在するグローバル 이슈を家族から聞き取ってくることである。

活動7「音楽をつくる（表現する：Represent）」では、国の祝歌をつくって、楽器を演奏したり叙情詩を作成したりするとともに、前時の宿題から得られたグローバル 이슈を分類する。それを受けて、今回の宿題は、重要度が高い三つの 이슈は何かを家族に聞いてくることとなっている。

活動8「グローバル 이슈を同定する（調査する：Research）」では、最初に散布図をつくり、持ち寄った三つのグローバル 이슈についての反応をグラフ化する。また、調査している国についての探索を進めつつ、飢饉や地雷、児童労働、女性の権利のようなグローバル 이슈についての情報を収集する。新聞の第一面の記事をローカル、リージョナル、グローバルの基準で分類し、棒グラフや線グラフで表現したりする活動も用意されている。家族へのインタビューは、それぞれの国は接していない方がよいのか、そうでないのか、それはなぜかを問うものである。

活動9「デルファイ法（対応する：React）」では、家族への聞き取りの結果を議論し、国は離れていた方がよいのかそうでないのかをさらに討論する。また、デルファイ法を応用して、グローバル 이슈の重要度の順番を決める。その上で、グループごとに調査したいグローバル 이슈を選択する。家族にもその問題に対する意見を聞いてくるのがここでの宿題となる。

表2 単元「グローバル村, グローバルな展望」の構成

学習過程	主な学習内容
1 気候帯を同定する (読む: Read)	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットやプリント資料で気候帯をチェックし、鍵となる気候帯を同定する。たとえば、温帯、熱帯、極地帯、乾燥帯、地中海性、山地帯。 ・『アリ, 砂漠の子』や『砂漠の嵐』のような絵本を使って、様々な気候帯の調査を始める。 ・調べた気候帯について発見した事実をブッチャーペーパーに列挙する。 ・宿題となる家族へのインタビュー:「気候は私たちの生活にどのように影響しているのだろうか?」
2 生き物をつくる (反応する: Respond)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族へのインタビューの結果をクラスで共有し、「影響」をブッチャーペーパーに列挙する。 ・物理的地図や気候図を使って世界の一般的な気候帯を同定する。「窓」の単元を振り返って、それぞれの気候帯のよく知っている都市やなじみのある場所を指摘する。 ・グループに分かれ、それぞれのグループに気候帯が割り当てられる。 ・クルミ(粘土でもよい)を割り、テンペラ絵の具やマーカー、フェルト、糸、動眼を使って少なくとも二つの生き物をつくる。牛乳パックやシリアルボックスで生き物の家をつくってもよい。 ・家族へのインタビュー:「違う気候帯の場所に住んだら、私たちの生活はどのように変化するだろうか?」
3 気候的に正しい生き物の家 (反応する: Respond)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族へのインタビューの結果をクラスで共有し、割り当てられた気候帯について学習したことを再考する。 ・机をグループの形にし、お互いに生き物を紹介する。その際に、生き物に名前をつけ、その歴史を考案し、多くの特徴を付け加える。 ・極地帯の家と熱帯の家の違いを学んだ後、入手可能な天然資源によって建物の材質がどのように異なるのかを探索する。 ・生き物にとって気候的に正しい家を、牛乳パックやシリアルボックスでつくる。 ・家族へのインタビュー:「私たちが熱帯に住んでいたら、家の中はどのようになるだろうか、あるいは、ならないだろうか?」
4 家がつくられ、国が始まった! (調査する: Research)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族へのインタビューの結果について議論する。 ・家づくりの仕上げにかかり、すぐにはわからない微妙な差異を説明しながら、それぞれの家の特徴をクラスで共有する。(21世紀の改良・変化についても考える。) ・割り当てられた気候帯に従って、新しい国を翌日につくるので、名前を覚えておく。 ・家族へのインタビュー:「割り当てられた気候帯の国が直面する問題は何だろうか?」 (教師は、次回に備え、少なくとも一つの島と一つの陸に囲まれた国を入れて、それぞれの国の輪郭をブッチャーペーパーに描いておく。)
5 グローバルな国をつくる…グループがそれを易しくしたり難しくしたりする! (対応する: React)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族へのインタビューから得られた問題をチャートペーパーに列挙した後、国の地図の周りを「歩き回る」。 ・気候帯の特徴を反映した国にする方法をブレインストーミングする。 ・国を描き、そこに家や生き物を位置づけ、ディテールを加える。 ・遅かれ早かれ、誰かが他の国の空間を侵害し、摩擦が生じる。 ・最初の爆発が起こったときに、クラス全体の作業を止め、フロアに座って何が起きているのかを議論する。 ・作業に戻り、それぞれのグループで国に名前をつけ、自分たちの見方を根拠づける特徴をつくる。 ・必然的に問題がエスカレートするので、再び座って議論する。 ・その問題(国境紛争、侵略など)が現実のグローバルイシューを模倣したものであることに気づく。自分たちが抱いた感情は、国家への忠誠心を模倣していることに気づく。 ・原因と結果を考察する。 ・戦争以外の解決法をブレインストーミングする。 ・家族へのインタビュー:「他国との問題を抱えている国は何ができるのだろうか?」

6	データを定義する (対応する: React)	<ul style="list-style-type: none"> ・割り当てられた気候帯に属する現実の国について集めた知識を読み、共有する。 ・「世界への窓」で作成した作品を取り出し、写真に注目したり、前に調査したデータをチェックしたりする。 ・家族へのインタビュー結果について議論し、自分たちが考案した代替案を加える。 ・カンントリーチャート活動へと移る。丈夫な厚紙に国の名前を記した旗をつくる。一方で、その国の言語、教育、好きな食べ物、天然資源、政府の形態、休日、輸出、輸入についての具体的なデータについてグループで同意する。 ・チャートを、それぞれの国の上部につるしておく。 ・家族へのインタビュー:「できるだけ多くのグローバルイシューの名前を挙げよう」
7	音楽をつくる (表現する: Represent)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族へのインタビューによって挙げられたグローバルイシューをすべて列挙した後、ローカル、リージョナル、グローバルとはどういうことかを議論する。 ・グローバルイシューのリストを三つに分類する。 ・カンントリーチャートに他の要素を加えるべく、国の祝歌をつくる。 ・祝歌の準備をする。楽器を演奏したり、叙情詩をつくったりする。 ・教師によって写し取られ、ハンドアウトにされたグローバルイシューのリストを受け取る。 ・家族へのインタビュー:「このリストのうちで、重要度の高い三つのグローバルイシューは何だと考えますか?」
8	グローバルイシューを同定する (調査する: Research)	<ul style="list-style-type: none"> ・散布図をつくり、持ち寄った三つのグローバルイシューについての反応をグラフに描く。 ・なぜみんなが一致していないのかを探り、合意が必要かどうかを議論する。 ・準備ができていないグループは、チャートを共有し、他の子どもたちに向けて祝歌を歌う。 ・グローバルイシューをよく扱っている週刊ニュースマガジン『Times for Kids』を読む。 ・飢饉や地雷、児童労働、女性の権利のようなグローバルイシューについての情報を求めてユニセフにEメールを送る。 ・一週間の新聞の第一面を読み、それぞれの記事をローカル、リージョナル、グローバルの基準で分類する。棒グラフや線グラフを用いて自分たちの見解をグラフにする。 ・家族へのインタビュー:「もしそれぞれの国が完全に他国から離れていて、それ故に、どこも他国と接していなかったどうなるだろう? それはこの世界をよりよい場所にするだろうか? なぜか、なぜそうではないのですか?」
9	デルファイ法 (対応する: React)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族インタビューの結果について議論する。 ・国は離れていた方がよいと考える子どもは教室の北の方に、国どうしが離れていることが世界をよくすることはないと考える子どもは南の方へ、決められない子どもは中央に移動する。 ・討論を始める。 ・それぞれのグループで再びチェックを行い、相手の意見を踏み切り板にするなどして、さらに考えを加える。 ・グローバルイシューのリストに戻り、デルファイ法を応用して、以下の作業に取り組む。まず、最も重要なイシューに25ポイント、次に重要なイシューに20ポイント、そして五番目のイシューに5ポイントを付与するようなやり方で、それぞれが五つのイシューに優先順位をつける。 ・国別のグループで作業し、イシューのポイントを計算する。重要度の高い五つのイシューを順番に列挙し、それぞれのグループが合計ポイントとともにリストをシェアし、さらにそれをまとめることで、イシューの重要度の順番を決定する。 ・国別グループで、最も調査したいイシューを選ぶ。(時間がなければ、ランダムに決めてもよい。) ・家族へのインタビュー:「私のグループが調査するグローバルイシューは〇〇です。この問題についてのあなたの考えは何ですか?」
10	劇こそまさにうってつけ! (表現する: Represent)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが選んだグローバルイシューについてクラス全員に教えるために調査を行い、寸劇を練習する。寸劇は、次のようになされる。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 問題を同定する。 2) それについていくつかの理由を提示する。 3) いくつかの可能な解決策を提案する。 ・家族へのインタビュー:「明日の国際ランチに参加しますか?」

<p>11</p> <p>お客さん、美味しい食べ物、そして私たちのグローバルな決定（対応する：React）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教室をシアタースタイルにして、家族を迎え入れ、持ち寄り食事を開く。 ・それぞれの新しくつくられた国とその特徴を、祝歌を歌ったりしながら紹介し、プレゼンテーションを行う。 ・調査するグローバルイシューをどのようにして決定したのかを説明する。 ・各グループが寸劇を演じ、可能な解決策を共有する。 ・いすをアレンジし、国連のグローバルイシューへの取り組みを学ぶ。「今日ここで出されたグローバルイシュー（実際には、児童労働、エイズ、森林破壊、難民、大気汚染、水質汚染、地球温暖化）のうち、新しい世紀、新しいミレニアムに移行するにあたり、どのイシューが国連の注目の的であるべきか？」について議論する。（※実際には、子どもは地球温暖化を選んだ。） ・家族へのインタビュー：「私たちのディスカッションについてどう思いましたか？ あなたは賛成ですか反対ですか？ それはなぜですか？」
<p>12</p> <p>アクティブなグローバル市民になる（省察する：Reflect）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の振り返りの後、家族の反応を共有する。 ・次の10年間で取り組むべきイシューと考えるものを伝えるために、国連事務総長に手紙を書く。ビジネスレターのフォーマットや手紙に書くべき約束事は次の通り。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 手紙の差出人の目的を同定する。 2. 問題を同定する。 3. なぜその問題が重要なのかを説明する。 4. 可能な解決策を同定する。 5. 事務総長に、ある特定の提案について考えてもらうよう促す。
<p>13</p> <p>結びつける（関連づける：Relate）</p>	<p>（理科や保健、音楽、美術・演劇、言語の教育との関連性が示されている。）</p>

(Lindquist, T., & Selwyn, D., *Social Studies at the Center: Integrating Kids, Content, and Literacy*, Portsmouth, NH: Heinemann, 2000, pp.63-79をもとに筆者作成。)

活動10「劇こそまさにうってつけ！（表現する：Represent）」では、選んだグローバルイシューについて調査し、それを寸劇にまとめる。寸劇は、1) 問題、2) その理由、3) 可能な解決策の三つの要素で構成される。

活動11「お客さん、美味しい食べ物、そして私たちのグローバルな決定（対応する：React）」では、家族を招いて持ち寄り食事を開く。自分たちが作成した国とその特徴を祝歌を歌ったりしながら紹介し、プレゼンテーションを行う。さらに、グローバルイシューについての寸劇を演じ、可能な解決策についてクラスで発表する。次に、国連がこれから取り組むべき中心的なグローバルイシューは何かを家族とともに考える。

活動12「アクティブなグローバル市民になる（省察する：Reflect）」では、次の10年間で取り組むべきイシューとは何かを伝えるために、国連事務総長に手紙を書く活動が行われる。ビジネスレターのフォーマットで、なぜその問題が重要なのか、可能な解決策は何か等を記していく。

活動13「結びつける（関連づける：Relate）」は、子どもの活動というよりは、他教科の領域との関連性について記されている。本單元では、地球温暖化や大気汚染、水質汚染、森林破壊、エイズの原因や解決策を調査し理解することが求められており、こ

れは理科と関連づけられている。また、保健カリキュラムの目的や目標とも結びついている。音楽や美術・演劇のスキルとも結びついているし、何よりも言語のスキルとの関連性が深いことが述べられている。

以上のように、本單元は「世界への窓」を発展させ、地理的な特徴と生活の関係についての認識を深めさせるとともに、グローバルな問題への概念的な理解を促すようになっている。そして、その過程で、広領域のスキルを成長させるように構成されている。

IV. 授業事例から見えてくる「社会科を中核にした統合カリキュラム」論の特質

1. 授業構成原理とその意義

リンドキストらによる「社会科を中核にした統合カリキュラム」論とその授業について見てきた。これまでの考察を整理し、リンドキストの実践から引き出される授業構成原理をまとめると、以下のようになる²⁵⁾。

第一は、社会科学習の中軸をテーマや概念の理解に設定し、それを効果的に達成するために他教科領域のスキルの活用を組み込む、というものである。リンドキストは、七つの「R」からなる活動を組織し、広領域に渡るスキルを活用してテーマや概念に迫る学習を構想していた。実際の授業の中では、導入で物語を積極的に活用したり、地図づくりや生き

物の家づくりという創作的（美術的）な活動を通して地理的環境と生活との関係を考えさせたり、隣国どうしが対立する理由を創作地図上でシミュレーションさせたりして、実感的で豊かな理解を促そうとしていた。さらに、言語や数学的な論理、美術のスキルの活用となるリサーチペーパーの作成などを通して、獲得した知識の整理や吟味を行わせようとしていた。以上より、社会科の教科としての主たるねらいを概念の習得におき、他教科領域はそれに必要な手段として主に位置づけられていることがわかる。

第二は、第一の原理とやや重複するが、他教科領域を、それぞれの内容よりもむしろ主題に関する深い考察を促すための方法としての面を重視した形で統合し、学習を組織する、というものである。教科を統合した学習を構成しようとすれば、社会科領域の知識内容から理科や音楽、美術領域の知識内容へと次々に派生させていくような展開も考えられるが、そのようにはしない。リンドキストの授業を見ると、理科や保健領域の内容理解も含まれるが、それらは、たとえば地球温暖化やエイズの問題を考える際の一つの情報としての位置づけになっていると考えられる。他教科の内容に深く踏み込まないことで、授業にまとまりを持たせ、学習の行き先を明確にしようとしていることがわかる。

「社会科を中核にした統合カリキュラム」論は、社会科のテーマや概念の理解という目標・内容の明確化と、方法における広領域化を基本原則とすることで、概念の効果的な習得を促すとともに、言語や音楽、美術等の領域にまたがる多重知能の発達を促進するものとなっている。

2. 課題

リンドキストらの統合カリキュラムは社会科の編成のしかたや実践の方法を考える上で興味深いのが、同時に、検討すべき課題も含んでいる。

第一は、授業の一貫性と領域的な広がりについてである。リンドキストらは、先に述べたように社会科の概念やテーマを軸にした学習を提案しており、授業の方向性は定まっている。また、リンドキストの授業では、カリキュラム・ディスクを作成することで、全活動がテーマや概念に向かうように設計されている。授業の導入においても、テーマや概念に夢中にさせることの重要性を説き、事象の類似点や相違点から導かれる気づきを大切にしている。そうした配慮はなされているものの、実際の授業を見ると、やや浮いている部分もある。たとえば、「グローバル村、グローバルな展望」では、祝歌をつくる場

面がある。これもテーマや概念に関係してはいるが、音楽の要素を組み込むこと自体が目的になっているようにも見える。領域を広げすぎると授業が拡散し、本来の目的であるテーマや概念の深い理解が妨げられる可能性もある。授業における一貫性と領域的な広がりとのバランスをどのようにとればよいのか。本稿で引き出した原理を応用して授業を開発する際の課題にもなるだろう。

第二は、学校カリキュラムにおける社会科の位置づけ、いわば占める割合についてである。リンドキストの授業では、内容面の統合が図られていないわけではないが、他教科領域の要素の多くはスキルに位置づけられており、欠落するものも多いだろう。学校カリキュラムをデザインするにあたり、社会科をすべての時間の中核に据えるものから、社会科の時間を統合的にするものまで様々なレベルが考えられる。学校段階による違いについても考察する必要がある。学校カリキュラム全体としてのバランスをどのようにとればよいのかが課題となってくるだろう。

V. おわりに

リンドキストらの統合カリキュラムは、リテラシーやコンピテンシーの育成のような現在の課題に対して社会科の立場を強く意識した主張・提案となりうるものである。「社会科を中核にした統合カリキュラム」論は、社会科の役割や独自性を強調しつつ、他教科領域との結びつきを図っていくものとして、一つの方向性を示している。

また、このような考え方は、日々の社会科教育実践に対しても示唆的である。ともすればそれ自体が目的となってしまうがちな言語力や思考力、判断力、表現力等の育成を、社会科の概念習得やテーマ理解に引きつけて実践するための具体的な方法論を提示してくれる。

本稿で考察したのは統合の一つのパターンであるが、意義とともに検討すべき課題も存在している。その吟味を含め、学校教育における社会科の位置づけや編成のしかた、とりうる選択肢や可能性についてのさらなる探求を続けていきたい。

【注】

1) このような能力は、〈新しい能力〉として注目され、様々な視点から研究が進められている。詳しくは、松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—』ミネルヴァ書房、2010年を参照。

2) National Governors Association Center for Best

Practices and Council of Chief State School Officers, *Common Core State Standards for English Language Arts and Literacy in History/Social Studies, Science, and Technical Subjects*, Washington, DC: Authors, 2010. 全米共通の学力基準を設定するために、2010年に英語／リテラシーと数学のコモン・コア・ステート・スタンダードが出版された。英語／リテラシーのスタンダードには、大学や職業準備のために歴史や社会科において育成すべき読み書き等の基準が明示されている。このスタンダードへの対応が求められ、全米社会科協議会 (NCSS) でも議論が続けられており、以下のような出版物が出されている。

- ① Altoff, P., & Golston, S., eds., *Teaching Reading with the Social Studies Standards: Elementary Units that Integrate Great Books, Social Studies, and the Common Core Standards*, Silver Spring, MD: NCSS, 2012.
- ② National Council for the Social Studies, *Social Studies for the Next Generation: Purposes, Practice, and Implications of the College, Career, and Civic Life (C3) Framework for Social Studies State Standards*, Silver Spring, MD: Author, 2013.
- ③ Swan, K., Lee, J., Mueller, R., & Day, S., eds., *Teaching the College, Career, and Civic Life (C3) Framework: Exploring Inquiry-Based Instruction in Social Studies*, Silver Spring, MD: NCSS, 2014.

①は読むことの教育と初等社会科の統合的な学習を提案するもの、②は大学 (College)、職業 (Career)、市民生活 (Civic Life) で求められる力を統合的に育成するための社会科のフレームワーク (「C3フレームワーク」) を示すもの、③は様々な組織や機関がC3フレームワークに基づいて開発した授業事例を紹介するものである。

- 3) 本研究では「統合」について論じるが、その対になる「分化」についても同様に検討していく必要がある。それについては今後の課題としたい。
- 4) 代表的なものは、白井嘉一『社会科カリキュラム論研究序説』学文社、1989年。また、1999年の『福島大学教育実践研究紀要』第36号と第37号に掲載されている白井嘉一・高宮文枝「コア・カリキュラム構想と『総合的学習』・『社会科学学習』」(I)～(IV)では、戦後のカリキュラム改革史についての多角的な考察を通して、総合的学習と社会科学学習のあり方が検討されている。他にも、

初期社会科における統合理念とカリキュラムについて分析した木村博一「初期社会科の統合理念とカリキュラムの実像－『学習指導要領社会科編I (試案)』の編成の特質－」『教育学研究』第68巻第2号、2001年のような研究を挙げることができる。

- 5) 学会においても大きなテーマとなっており、たとえば、2002年の日本社会科教育学会の『社会科教育研究』No.87では「社会科と総合的学習」の特集が組まれている。
- 6) Lindquist, T., & Selwyn, D., *Social Studies at the Center: Integrating Kids, Content, and Literacy*, Portsmouth, NH: Heinemann, 2000. 本書では、リンドキストとセルウィンがそれぞれの授業事例を記している。リンドキストのものは主に初等を、セルウィンのものは主に初等高学年から中等を対象にしている。また、セルウィンは、11学年の合衆国史の事例を用いて、統合アプローチは、中等段階では確かに難しいが、可能ではあると論じている (p.89)。こうしたことから、本書が全学校・学年段階を視野に入れていることがうかがうことができる。なお、本書の時点においてリンドキストはベテランの小学校教師であり、セルウィンは公立学校の教師であるとともにワシントン大学で授業を行い、教育コンサルタントも務めている。二人にはそれぞれ単著もあるが、本稿では本書の主張にしたがって考察を進めることにする。
- 7) *Ibid.*, p.1.
- 8) *Ibid.*, p.8.
- 9) *Ibid.*, p.9.
- 10) *Ibid.*, pp.10-11.
- 11) *Ibid.*, pp.17-18.
- 12) *Ibid.*, p.186.
- 13) *Ibid.*, p.22.
- 14) *Ibid.*, p.23.
- 15) *Ibid.*, pp.25-26.
- 16) *Ibid.*, p.26.
- 17) *Ibid.*, p.158.
- 18) *Ibid.*, p.26.
- 19) *Ibid.*, pp.181-182.
- 20) *Ibid.*, pp.34-42.
- 21) *Ibid.*, p.58. (単元「世界への窓」のカリキュラム・ディスクより判断した。)
- 22) *Ibid.*, pp.42-63. (単元「世界への窓」についての記述部分をもとに、この節の以降の文章では概要を整理して示している。)
- 23) *Ibid.*, p.76. (単元「グローバル村、グローバル

- な展望」のカリキュラム・ディスクより判断した。) 24) *Ibid.*, pp.63-79. (単元「グローバル村, グローバルな展望」についての記述部分をもとに, この節の以降の文章では概要を整理して示している。) 25) 本来であれば, セルウインの授業 (単元「移住」) についても個別に検討する必要があるが, ここでは, 取り上げたリンドキストの実践を中心に論じ

ることとする。

付記

本稿は, 科学研究費補助金基盤研究 (C) 「教科や科目の分化と統合を視点とする小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムの研究」 課題番号 26381207 の研究成果の一部である。